

鮮やかな夏の初体験⑤ ～アダルトビデオは参考書？体位実験編～

体験版

※この作品に登場する人物はすべて 18 歳以上の成人です。実在の未成年・学校・団体とは関係ありません。

「孝史、お願いがあるの……？」

今日も、いつものように俺の部屋にやってきた彼女・里桜と一緒に、机に向かって勉強をしていた。

教科書とノートが散らばる狭い空間に、彼女の甘いシャンプーの香りがほんのりと漂っている。

ペンを走らせる音だけが静かに響く午後の陽だまりの中で、ふと、彼女が神妙そうな顔をこちらに向けた。

唇をわずかに噛み、視線を泳がせ、どう切り出そうか迷っている様子が、ありありと伝わってくる。

「どうしたの？ 言っているよ？」

俺たちの関係に、何か不満でもあるのだろうか。

そんな不安が、胸の奥で小さく疼いた。

「孝史のパソコンを見せて欲しいの」

その一言が、俺の脳裏に電撃のように走った。

来たか……。

いや、いつかは来ると思っていたイベントだ。

「普段、孝史が……その……どんなエッチなもの、見てるか知りたいの……ダメかな？」

顔を真っ赤に染め、視線を逸らしながらも、はっきりと口にした里桜。

彼氏がどんな性癖を持ち、どんなもので性欲を処理しているのか。

彼女ならば、気になって当然だ。

だが、大丈夫だ。

俺はいたってノーマルな性癖の持ち主だ……はずだ。

「う、うん……わかった。じゃ、PC 起動させるね」

床に座っていた俺たちは勉強机へ移動し、俺だけが椅子に腰を下ろす。

スリープ状態のデスクトップを起動させると、ファンの微かな音が部屋に広がった。

背中を伝う変な汗が、シャツにじっとりと染みていく。

「何が见たいの？ 動画？ 画像？ 本？」

「ん〜……まず、動画！」

まず、か。

全部見るつもりなのか？

そんな不安を抱えながら、俺は動画サイトにアクセスした。

バイトで稼いだ金を、結構な数の AV に注ぎ込んでいる。

購入履歴のページを開くと、パッケージ画像がびっしりと羅列される。

「へえ〜、いっぱいあるねえ〜」

引くどころか、感心したような声が返ってきた。

「えっ、引かないの？」

「うん？ だって、男の人なら AV 見るのなんて当たり前でしょ？」

そして、里桜が選んだ一本を二人で見ることになった。

俺のお気に入り女優のデビュー作品。

映像を進めるたびに、里桜は興味津々といった様子で画面を眺めている。

「うわぁ……女の人、恥ずかしそう……私も、孝史の前で下着姿になるの、恥ずかしかったなぁ……」

さらに映像が進んでいく。

「あ、やっぱり初めは正常位なんだね。私の価値観が合ってたよ良かった～」

「ん？ 女優さん、感じちゃってる？ 嘘だー！ 絶対演技だよー」

女性目線の実況に、俺は面白がって耳を傾けていた。

こんな率直な感想を間近で聞くのは初めてだった。

そして。

画面の中で女優が四つん這いになり、男優が後ろに回る。

「孝史、これがバックってやつ？」

「うん、そうだよ」

「ねえ、孝史」

里桜は突然動画を止め、こちらを振り返った。

「私達って、正常位しかエッチしてない？」

「あっ……」

確かに、そうだった。

俺たちはこれまで二回しか身体を重ねておらず、そのいずれも正常位だけ。

「私たちのエッチの段階、ちょっとおかしくない？」

「いや、そんなことはないよ！」

「そうなんだあ、ふうん……」

彼女は何か考え込むように、再び画面を見つめる。

そしてバックのシーンをじっと眺めながら、ぽつりと呟いた。

「バックって、気持ちいいのかな……？」

嫌な予感がした。

いや。

これは、期待してもいい予感なのかもしれない。

「孝史」

「ん？」

里桜がこちらを振り返る。

頬は少し赤く染まり、瞳には好奇心が満ちていた。

そして彼女は、はっきりと言った。

「今から、エッチしよ！」

「えっ！？」

「バックの体位、してみたい！」

唐突すぎる申し出に、俺は言葉を失った。

「どうせ、今日もする予定だったんでしょ？ 私もそのつもりだったし」

そして、少しだけ悪戯っぽく笑う。

「下着は、紫のTバックだよ」

「……正直、やりたいです」

「よし！ なら、決定！」

そう言い切ると、里桜は躊躇なく服に手をかけた。

AV を参考書にした、俺たちの初めての『体位実験』が始まる。

——体験版はここまで——

続きは製品版でお楽しみください。